

「弟子入り志願」メール



浅野 晃

広島大学大学院工学研究科情報工学専攻
E-mail asano@mis.hiroshima-u.ac.jp

1. はじめに

「研究生になりたいのですが」「Request for research opportunities」といったメールが、毎週のようにやってきます。要は、私の研究室に留学したい、つまり「弟子入り志願」のメールです^(注1)。

正直、うんざりすることもあります。しかし、無下に断ることはしないつもりでいます。自分自身も、在外研究の受入先を探すとき、外国の見ず知らずの先生にメールを書いて受け入れてもらったことがあります。それに、私が勤めている大学院は、対応する学部の学部生が少なく、また全国から受験生が殺到するようなところでもありませんから、外国からの留学生は積極的に受け入れたと思っています。

しかし、正直なところ、外国の学生からメール1本をもらっても、その人の学力や研究能力が分かるはずもありません。また、教員の側も、時間も労力も限られていて、どんなメールにも全力を使って対応するわ

けにはいきません。

そこで、この「弟子入り志願」メールをどんな風にかけてきてくれるか、期待感を持って対応する気になるか、私見を書いてみようと思います。先生方や、いま日本の工学系大学院で勉強している留学生の方にお願ひしたいのですが、これから留学しようとしている人に、ある教員の考えとして伝えて下されば幸いです^(注2)。

2. 心構え

まず初めに、本論に入る前に、明確にしておきたいことがあります。

それは、大学院とは、何をすることか、ということです。

留学しようという学生の皆さんは、当然「勉強するところ」だと答えるのではないのでしょうか。それは間違いではありませんが、日本の工学系大学院では、その前に、大学院は、研究するところ、です。

国によっては、修士(master)学位はコースワークだけで取る大学院

もありますが、日本の工学系大学院では、博士課程(博士後期課程)のみならず、修士課程(博士前期課程)においても、学位論文が必須です。それどころか、実際のところ、コースワークよりも修士論文の方がはるかに重視されており、学会等で発表できるレベルの修士論文を書くのが当たり前です。近年は、大学院は社会が本当に必要とする人材を輩出すべきである、という考えから、修士論文だけでなくコースワークも含めた総合的な大学院教育を志向するようになりつつありますが^(注3)、現状ではやはり、上記のレベルの修士論文が要求されています。

また、大学院では、教員の指導の下で研究をします。学生の勉強のための研究をしているのではなく、新たな知見を生み出す最先端の研究です。そのため、教員の研究の方針には、ある程度従ってもらう必要があります。学生の独創性を育てないのか、といわれそうですが、最先端の研究における独創性というのは、十分な知識と経験の裏付けがあって初めて発揮できるものです^(注4)。学生に「俺のやり方でやる」と言われても、新規性や有用性のないことはやっても仕方ありません。

ですから、「自分の勉強だけがかしたい」人には、日本の工学系大学院

(注1)：“Prayer for a research position”なんてのもありました。神様じゃないんだから、祈られても困るのですが…

(注2)：この記事は、元々は、学会の留学生向けWebページに載せる予定のものでした。

(注3)：これを「大学院教育の実質化」と言っています。今までは空虚だったのでしょうか？

(注4)：私が学生るとき、ある教授は「大阪城を建てたのは豊臣秀吉である。大工ではない」と言い放っていました。さすがにこれは、ちょっと言い過ぎだと思えます。

は不向きです。そういう人は、大学院ではなく学部に入るべきです。

3. 各 論

さて、教員の立場として、どんなメールなら返事をしたくなるのでしょうか。それは、一言で言えば、受入れを希望する教員について、きちんと研究し、その教員の指導を受けたいということが、はっきり、かつ根拠を持って分かるメールです。

図1は、私のところに届いた「弟子入り志願」メールを、一部改変したものです。こんなメールには返事をしたくありませんし、実際しませんでした。

まずいけないのは、“Dear Sir”です^(注5)。こういう宛名のないメールは、手当たり次第にばらまいているのが見え見えで、スパムメールとさほど変わりません。留学のチャンスを生かすために、たくさんの人にメールを送るのがいけないわけではありません。それがあからさまに見えるのは良くない、と言っているのです。

次に、なぜその教員の指導を受けたいのか、を明らかにする必要があります。図1の例のように分野を示すのではなく、どんな研究をしたいのかを述べなければなりません。受入れ教員を探すときには、教員のWebサイトや論文を見て、その研究に興味を持った教員にコンタクトを取るのだと思います。それならば、その教員の研究内容を踏まえた研究計画を提案すべきです。「勉強したい」のではなく、「研究したい」ことをアピールすべきです。これは、特に博士学位を目指して博士課程に入る場合に重要です。3年間の在学期間中に博士の学位を取得するためには、査読付き原著論文を、在学中に2編か3編発表しなければならぬのが普通です。査読やそれに対する手直しの期間、それに学位審査にかかる時間を考えると、それだけの論文を実質2年間で完成させなければなりません。ですから、教員と議論した上で、かなり具体的な研究計画を入学前に立てておく必要があります。

なお、修士課程でも、研究をしな

ければならないのは先に述べたとおりですが、博士ほど厳しい基準は課されていないのが普通です^(注6)。その一方で、修士課程に入るには、それなりに厳しい入学試験があります。大学院留学生には、日本の大学にまず研究生として入り、入試を受けて翌年大学院に進む人が多いですが、研究生としての在籍期間は最長2年間で、その間に必ず合格しなければなりません^(注7)。筆記試験がある場合は、教員に頼んで問題を手に入れておくべきです^(注8)。

さて、図1の例でも自分の専攻分野が述べられていますし、プログラミング言語のスキルや、大学での成績をアピールする人もよくいます。ただ、私自身は、それらは余り重視しておらず、どういう科目を取ったのかを参照するためにしか用いていません。成績表を見ても、どういう基準で評価されているのか分からないので、どの程度の実力なのかは分からないからです。私の判断基準は、文章力です。研究計画や修士論文の要旨（博士課程進学の場合）を、筋が通った文章で書いていけば、学力があるものと推測しています^(注9)。

それから、ここまで書いたこと以上に重要な、受入れ側の教員として一番心配なことは、お金の問題です。「来日してから何か奨学金を探しますので、入学させて下さい」などということでは、絶対に受け入れられません。「アルバイトします」というのは論外です。学費と生活費をアルバイトで賄うのは、日本人学生にとっても並大抵のことではありません^(注10)。ましてや、留学生には労働時間の制限があります。

特に、どこに住むのかというのは大きな問題で、家探しは教員にとっても心配の種です。寮や留学生会館といった、安い家賃・保証金で入れる住居が、必ずしも完備されているとは限りません。私が今まで受け入れた留学生は、皆そういうところに入居できていますが、それは単に、今まで運が良かったからにすぎませ

Dear Sir,
I am XXyears of age and a holder of XX Diploma in Electrical Engineering from XX University, the Republic of Nanigashi.
Need your advice about continuation of my education at your noble faculty.
To study Software Engineering from Research to Doctoral level.
Looking forward to hearing from you soon.
Thanks;
Nanibei Nanino.

図1 ある「弟子入り志願」メール こんなメールには返事したくありません。

(注5)：まず、正しい英語で書け、いやそもそも日本語で書け、というのはさておき。
(注6)：「何かの研究集会で発表すること」という基準のある大学院が多いらしく、院生の「駆け込み発表」のために、本学会の技術報告が3月だけやたらに分厚い、ということが起こります。
(注7)：これはビザの制限のため、最近特に厳格になっています。私の所属する大学院では、2年の間に入試に合格できず、やむなく帰国する人が増えており、問題になっています。
(注8)：私は、「弟子入り志願」のメールに返事する場合、まず過去の入試問題を送っています。そのまま音信不通になってしまうことが多いのですが…
(注9)：ただ、確かに本人が書いたものかどうかは分からない、という問題はあります。実際に、だまされたこともあります。
(注10)：広島大学大学院工学研究科では、博士課程の院生をリサーチアシスタントとして雇い、授業料相当の給料を支払う方がとられています。それでも、家賃を含む生活費を賄うのは大変です。

ん。

こういう心配があるために、留学希望者の親類・知人が、既にその大学あるいはその近くにおいて、直接話ができる場合は、教員としては心強いです。いわば身元保証人ですが、その人がお金を出してくれるわけではありません。それでも、相談できる相手がいるというのは、その学生にとってだけでなく、教員にとっても、何かしら安心できるものです。

4. その他、いろいろ

・断るとき、断られたときこそ、丁寧に

前の方にも少し書きましたが、メールのやりとりをしているときに、いきなり音信不通になってしまう人がしばしばいます。恐らく、他に応募することになったので、こちらの件はとりやめたい、ということなのでしょう。ですが、そういうときに黙って交渉をやめてしまうのは、よくありません。教員の側も、いろいろなところに応募しているだろうことは想像していますし、応募を取りやめることは、悪いことではありません。むしろ、そういうときに丁寧に応対しておけば、その後もその教員とつながりができ、将来何

かの役に立つ可能性があります。これは、教員の側から断られたときも同様です。「断られたときこそ、丁寧に礼状を書く」というのは、よくいわれることです。

・ Mr. とは呼ばないで

理科系の大学教員は、まず間違いなく博士号を持っています。英語で手紙を書く場合、敬称は必ず Dr.、相手が教授の場合は Professor にしましょう。Mr. (あるいは Ms.) だれそれと書くと、機嫌を損ねることがあります^(注11)。実際のところ、だれに対しても Mr. で十分な敬意を表しているという文化もあると思うのですが^(注12)、こんなことでせっかくの機会を失ってはつまりません。

・言葉のこと

私の所属する広島大学大学院工学研究科情報工学専攻では、講義や研究指導が英語で受けられることを保証する“Teach-in-English”プログラムを、十数年前から実施しています^(注13)。こういう大学院は、今では珍しくなくなりました。ですから、日本語が分からなくても勉強や研究はできますし、論文は英語で書くのですから、英語ができれば十分、という考えもあるでしょう。しかし、私は、日本に来たら少しでも日本語を覚えることをお勧めします。留学

生活は、勉強や研究だけではありません。ふだんの生活で得られる知識や経験は、現地の言葉が分かれば分かるほど豊かになります。せっかく日本に来てくれたのですから、少しでも日本のことを知って帰ってもらえればと、日本人の一人として思います^(注14)。

5. おわりに

新しい学生を受け入れるのは、教員としても、不安なものです。しかし、お世話をした卒業生の活躍はうれしいものですし、私のところに来てくれた留学生の中には、帰国後も、私の研究の面で大きな力になってくれている人もいます。日本の大学院に興味を持って下さった学生さんと、日本の先生方との間に、少しでも多くの幸せな関係ができることを願っています。

(平成 21 年 3 月 31 日受付)

あさの あきら
浅野 晃 (正員)

昭 62 阪大・工・応用物理卒。平 4 同大学院博士課程了。同年九工大・情報工・助手。広島大学総合科学部助教授、同教授を経て、現在同大学院工学研究科情報工学専攻教授。博士(工学)。画像科学・感性工学の研究と統計学の教育に従事。

(注 11)：知り合いの先生に、実際に損ねていた人がいます。

(注 12)：最近では毎年インドネシアに行っていますが、そこではだれからも Mr. Asano と呼ばれます。“Mr. …えー… Dr. Asano,” と呼ばれたこともありましたが、もしかして私の顔が一瞬曇っていたのでしょうか。

(注 13)：受講者が日本人ばかりでも、英語で講義する先生もいます。私は、クラスに留学生と日本人の両方がいるときは、日英語を交互に使って講義しています。かなり、疲れます。

(注 14)：私は、最初に述べた在外研究でフィンランドに行きました。たった 10 か月の留学期間なのにフィンランド語の教室に通ったりして、周りからは不思議がられました。しかし、それによって知ったフィンランドの人々の考え方からは、現在も大きな影響を受けています。